

---

# 大らかな空とギャグに

高本順二朗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大らかな空とギヤグに

### 【Nコード】

N3383E

### 【作者名】

高本順二郎

### 【あらすじ】

実験作品。内容の出来は度外視。

この世で一番恥ずかしいコト。それは…スベってしまつ事である。空気が読めなかつたり、場の空気を濁してしまつようなスベりは特に決まりが悪い。

だが、スベらなければ笑いと言うのは学べない。言わば「汝スベリを知れ」。

ではスベってばかりいれば笑いがドカンドカンとれるようになるのか？否だ。

結局その肝心な部分は自分で拓くしか無いというのが「お笑い天下道」なのだ。

そして今、俺はこの長く緩やかな「天下道」をKちゃんこと高橋慶子ばりに駆け抜ける  
チョー面白いヤツなのである。わはははは！

|| ||

「既にスベってるな」

冷静に状況分析を終えた相庭が口を挟む。

「何言つてんだ。まだ俺はギャグもやってないぞ」

「あんなー、登場の口上でスベるなんて前代未聞だぞ」

「ああ！？どこが？」

仕方ないかといった感じで面倒臭そうに相庭が説明を始める。

「良いか？まず『お笑い天下道』と言うのが何なのか漠然過ぎて受け手に伝わらない。次にKちゃんの下り。ここは最高にサブい」

「ここが最高なんだろ！？どう見たって『笑えます笑えます、くけけけ』と大爆笑間違いなしの話だろ！？」

「落ち着け、俺の説明は終わってない。一番最後の『チョー面白いヤツ』なんか最悪だ。これを聞いただけで絶対に期待できないという臭いがブンブン立ちこめてやがる」

「…そうかなあ？」

思わず弱気になる宮下。絶対的自信を持って披露した口上がこうもあっさりばっさりやられると、プライドと言うよりも自分の人間性自体を否定されたようで仕方が無いのだ。

「まあ俺ならこうする」

相庭はオーバリアクションな動きでターンを4回綺麗にキメた後、叫んだ。

「かーちゃん！ネギいれんといてー！」

沈黙。あまりの相庭の変貌振りに笑うというより引いた宮下。

だがそれが何故か宮下の中でくすぶり始め、やがて狭きスイートスポットへと入り込む。

「…く、くくくく…あはははは！何じゃそりゃ！」

「なー？面白いだろ？」

傍から見れば何と言うか、可哀相な人が二人居るようにしか見えな

い。  
だがこの二人の間には見えない力が働き、それが思わぬ方向へと捻じ曲げられ宮下は笑ってしまったのだ。

「フーか最初のターンを綺麗に四回つたのには何か意味あるのか？  
…くく…くくく…っ」

「そうだな…最近の芸人の動きを考えると派手な動きが要るように思えてな」

「あー、あー、そーい…そーいう事な…くく」

こうなると宮下は三十分くらい止まらない。一回ツボに入ってしまったと確実に脳内でくるくると笑えるシーンがかき混ぜられ、笑いが

止まりそうになると脳内で映像が再生、再び笑うと言つ華麗なるスパイラルに嵌ってしまうのだ。

「ひふー」

「さて、そろそろバカな事をやってないで勉強でもするか」

「あ、ああそうだな、ん…んんんっ…っ」

「お前もツボから抜ける」

無理な事は承知の上で相庭は言う。手を挙げて分かった分かったと首を縦に振ってみせるがまあ止まらない。

結局宮下の笑いが止まったのはそれから四十分くらい経過した頃で、外ではしとすと雨粒が地に足を付けていたのだった。

|| ||

「ところでな宮下」

「ん？」

「ここは何処だ」

雷も鳴ってどうどうと外が慌しくなるなって、相庭は外を確認する。だがそこにいつもの宮下家の眺めは無く。明らかに別世界と化していた。

「俺にも分からん。恐らく俺らのお笑いパワーが招いた悲劇だろ」

「よくこの状況で冷静だな…つか何かヤバいんじゃないか？」

外にはこちらに向かってくる特殊部隊十人。しかも外装がどう見てもS ATのアレである。

「あ、机の下に何かあったわ」

「何じゃそりゃー!？」

M16二挺、さてどうする相庭。

「どうするったって…やるっきゃないだろっ」

んじゃあ後は頑張っつて。

「つーかこの声どこから…」

「来るぞ相庭！」

お前らに勝ち目は無いぞー！

「ああもう煩い！」

ガシャン！リビングのガラスが割れた。そこには何かが投込まれて  
いる。

「催涙弾だ！逃げるぞ相庭！」

「う、嘘だろ！？」

二階へと退散する二名。だが二階に行く為の玄関の通路の先には既  
に…。

「くそっ！もう既に前に居やがるぜケビン！」

「ああ！どうするよトム！」

ケビンは状況を整理する。玄関には三名のS A Tもどき。だが先  
ほど居たりビングには戻れない。催涙弾やらその他諸々で戻れたも  
のじゃない。

咄嗟に洗面所に隠れたが、ここの扉もどれだけ持つか分からない。

ケビンは考える。

「トム！いい方法がある！」

「何だケビン！」

「お前、確か砂鷹二挺持つてるよな？」

「ああ、コレだろう？」

得意げに砂鷹を見せるトム。ケビンはそれを奪い、言う。

「カミさんに伝えてくれ、お前の事は死んでも愛してるってな」

「ケビンー！」

洗面所の戸を開け、玄関に居るもどき三名に鉛の弾をプレゼントし  
ていく。だがそれらは間一髪のところまで避け続けられる。ケビンも  
ガンッカ よろしく体を捻りながら弾の雨を避けていく。

「（漢だぜ…ケビン！）」

トムはその避ける様を感心しながら、どこかでケビンが負ける予感  
を感じていた。この状況ではまずいと。

ならばヤツを呼ぶのだ！トム！

「ああ、頼むぜゴレゴ」

「…」

ゴレゴはまずもどきの一人をヘッドショットで消し、即座に二人目へ照準を合わせ足、腕、肩の順で相手の動きを止める。三人目が動揺した所をケビンは見逃さなかった。

「うらっしやあ！貰ったぜ犬畜生！」

「なんの！俺はハリウッド生まれだからッ！」

ケビンが隙を突き引き金を引いた瞬間、もどきの体は膝から上が綺麗に後ろへと反り返り、どこかの映画で見たような格好で形勢を立て直す。

「何ッ！？」

「ふはははは！見たかハリウッドの力！」

「…だが、後ろはガラ空きだな」

「しまっ」

ターン！ゴレゴの華麗なるヘッドショット！もどきはハリウッドの技術を持ってしても復活はしなかった。

「…行くぞ、相庭、宮下」

「児島すまない！恩に着るぜ！」

「だがどうしてここに居るんだゴレ…じゃない児島」

「見えない力だ…恐らくこの世界からお前らを救うためだろう」

「しかしケ…じゃない、相庭大丈夫か？」

「何が」

「怪我だよ。あんだだけ撃たれたのに良く平気そうな顔してるな」

「ああ、全く当たってないからな」

そう、相庭はあの時微弱ながら立ち位置を変え続け、1分間も銃弾の雨を避けきつたのだ。玄関の通路が広がったという点を持ってしても常人技ではない。

「と言うより普通砂鷹は片腕で持てない」

「ふ…お前らとは鍛え方が違うのさ」

「ほう?」

相庭は白い歯を見せてニカツと笑い、得意げに

「毎日毎日親父の手伝いで峠を上ったり下ったりしてるからなっ!」

と、二人に自慢した。序でにサムアップまでして。

直ぐにその場の空気が固まる。

「…スベったな」

「ああ、スベった」

「何で!？」

相庭はどうやら今度もウケると踏んだのだろう。だが結果としては素晴らしいほどにスベった。

清々しいほどにスベった。誰もが許してしまうくらいに綺麗にスベった。

「煩い煩い!大体言いすぎなんだよ!そんなに追い詰めなくたって良いだろ!？」

「お前は誰にキしてるんだ?」

不思議がる宮下を他所に、相庭は復讐心を燃やす。

「(おのれ…何時か見てるよ!?)そちの席に座ってるからって何時までも傍観者で居られると思ったら大間違いだぜ?」

「声に出てるぞ相庭」

「あ!?!え!?!何でカツコが途中で切れてるんだよ!」

「お約束だな」

彼らのくだらない話はまだまだ終わりそうになかった。

|| ||

「…ふう、何とか宿に付けたな」

「お、賢者タイムか?」

「…友人の前ではしたないぞ」

「してねーよ！つかいい加減にしるよ！」

相庭はそれまでのキャラがどこかへ行つて百八十度転換してしまつたようないじられキャラに成り下がっていた。

「成り下がるとか言うな！」

「だからさつきから誰にキレてるんだお前は」

「…もついいさ。んでこれからどうする？」

「どうするも何も決まってる」

宮下はどこから取り出したのか分からないほど大きな画用紙を広げる。

「なんだこれ」

「計画表」

そこには大雑把にこう書かれていた。

・第一章 俺たちはランナウェイ！

ハードボイルド活劇第一章！興行収入30億リラの話題作が遂にニッポン上陸ネ！

・第二章 戦場のメリーさん

ここは戦場。そして確実に食われていく仲間！俺たちの運命はいかに！？

・第三章 マックススピード キョウトドリフト

クレイジーでファンキーなタクシーが黒鳥とか赤木の黒い三連星を京都でブッチぎる！

「…なんじゃこりゃ」

「これからの計画表だ。まずはハードボイルドから始めるぜ」

「…どついつ話だ？」

話せば長い。

|| ||

「ハードボイルドな野郎は三つに分けられる。

- ・女にモテるヤツ
- ・拳銃の扱いが上手いヤツ
- ・ジェローラモ

この三つだ。アイツは

」

<<ちよつと待て、相棒<sup>バディ</sup>は俺か？>>  
思わずPJはピクシーに確認を取る。

<<…俺しか居ないだろ。常識的に考えて>>  
サイファーが口を挟む。

<<あれは雪の降る日のことだった>>

|| ||

「いやおかしいだろ」

「何がだ」

相庭は説明を止めさせ、宮下に詰め寄る。

「大体俺らはお笑いの話をして平和にやってただろ？それが何故こ  
うなる？」

「……そうさ、俺らはまだまだEndまで果てしなく長いStor  
yを歩み始めたのさ……」

「おーい、また変なキャラ入ってるぞ宮下ー」

「……相庭よう、いい加減慣れたらどうだ？」

「うわ！？児島まで壊れた!？」

「とりあえず説明を続けるのさ……」

||

ウウウウウン……

十二時を回るその時、戦場に一つの警鐘が鳴り響く。

「くそっ……ダメだったか！」

宮下は思わず土を蹴る。

「……怒りに奮えるのは後だ。先を急ぐぞ宮下」

「ああ……そつだな児島」

だがその行く手には第一村人達が鎌だの鉈だのを持って立ちほだかる。

「……総数四。やれるぞ」

「よし、行くぜ！」

……。

「コマンド どうしますか？」

みやした ニアこつげき

まほう

しょうかん

あいてむ

みやした の こつげき！

だいいちむらびと に 24 のだめーじ！

「……ってちよつとまでー！」

「またかお前は」

宮下は不機嫌そうに相庭を見る。

「良いか!? コレは紛れもない現実なんだぞ!? そんな中でよくお前は妄想に耽つてられるな!」

「…相庭、俺のターンがまだだ」

「お前は黙つてる兎島!」

「はあ……仕方ない。次行くとするか」

宮下は最後のポイントに指を合わせる。

||  
||

「オレに注文は?」

「ない。お前の作ったエキゾーストはベストだヨ。コジ」

主都高わんにゃん線、市松PA。宮下とコジは確実に32Tのセッティングを詰めていた。

「たとえば、ノーマルエンジンノーマルターボにガasketだけかえて、ブーストを1.8くらい掛ければ300km/hは軽く出るだけどそういうのはオレの考えるチューンじゃない」

宮下は飲みかけのコーヒーを一気に飲む。

「ターボはあくまで補助的なもので、エンジンそのものがパワーを欲するものでなきゃダメなんだ」

「あくまで理想を追いたい・・と」

コジは嬉しそうに宮下に問いかける。確実に速くなっていつている32Tに乗って気分が高まつてるせいもあるが、コジの顔からは昔以上の楽しさが見える。

「とにかく帰ったらもう一度バラしだナ」

その時だった、宮下の前に一台のマシンが現れる。

わんにゃんの怪鳥旗、フラッグバード。

「乗れッコジ!」

32Tを即座に出し、フラッグバードを追う。

「は・・・速えええツ！」

宮下は前を走るフラッグバードを追いながらも、ガンさんが言っていた事を思い出す。

「（西見はナ・・・別の見方をすればすぐまじめな職人なんだ。機械が一番いい状態にもってゆく男なんだ）」

「コラア！とうとう俺居なくなってるぞ！」

「ん？ほら、居るじゃん」

「どれ？」

「フラッグバード」

「…嬉しいには嬉しいがセリフくらい欲しいよ！っーかコレは流石にまずいよ！」

「えー？」

宮下の妄想はまだ続くが、相庭はもうダメだった。付いていけない。

「ムリだ　　これ以上コイツに付き合ったらエンジンイカれちまう　　！」

＝  
＝

結局その後十時間くらい宮下は延々と妄想話をし続けた。

とめどなく溢れるその妄想力に、二人は為す術なく落ちていくだけだった。

その後彼らがこの歪な世界から抜け出せたかどうかは、誰にも知る事は出来ない。

だが結論は導き出せる。

結論：ギャグは長くやるより、短く分かり易いのが良い。

「っーかコレ全部ボケかよ」

その通りだよ相庭君。ショートストーリーにもならない、ね。

大らかな空とギャグに 完

(後書き)

内容を度外視して滅茶苦茶なものを書きました。お陰で混沌とした  
ないように仕上がっています。

短いようですがこれで後書きとさせていただきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3383e/>

---

大らかな空とギャグに

2010年10月15日23時05分発行